

2021年6月20日(日)／説教者：神谷武宏

説教：「イエス・キリストの黙示」—6・23 沖縄戦の悲劇を覚えて—

聖書：ヨハネの黙示録1：1～8

ある宮古島ご出身の先生から一つの戦争体験を聞いた。戦時中、宮古島には多くの日本兵が駐留していたが、4歳の頃、父親はサトウキビの収穫を終え、絞り汁を鍋で煮ていた。香ばしさが漂うと、その近くを子供はうろうろする。煮詰まると鍋の周りに薄い飴状のかたまりが出来て父親はその薄い砂糖のかたまりを少し削り、紙に包んで子供に持たせたのだった。喜んで家に向かうと、しばらくして父親が「戻ってきなさい」と叫んでいて、振り返ると、父親が日本兵に殴られていた。日本兵は「採れた作物は全てお国のもの、天皇陛下のもの。勝手に子供にやるな！」と怒鳴り、殴られたのである。その時、子供の目には、お父さんがかわいそうで、怖く、悔しく、悲しくて…。その時から、日本人が嫌いになった…と話された。その方の一つの戦争体験であるが、ただ、そのような時代は、もう過去のことなのか。今の沖縄を見ると、日本からお国のためと軍事基地を押し付けられ、少しでも抵抗すると殴られる沖縄がある。沖縄を見ると悔しく、悲しく…そんな思いが募る。沖縄がいまだ戦時の中にあるかのよう。

しかし、当然ながら戦時ではない。私たちは、間違っていることに対して、声を上げ、今できる平和の発信をして行きたい。沖縄には、平和への真理が隠されているのかと思う。沖縄戦から76年、平和への思いをさらに強めたい。

ヨハネの黙示録は、信教の自由が奪われ弾圧された中で書かれた。しかし、この書には失望感は見られない。むしろ力強い、励ましの言葉、確信に満ちた言葉で綴られている。何故か？ それは、イエス・キリストは、死んでいるのでも、不在なのでもない。また、隠れているのでも、沈黙しているのでもない。キリストは、教会の中に存在し復活のキリストからのメッセージが語られている。

今や、パトモス島のヨハネから神の言葉が語られていく。アジア州にある七つの教会へ。ヨハネが捕らえられたと聞いて、教会はどれ程恐ろしく、虚しく、悲しく、失望の中にあつたことか。アジア州にある七つの教会は、イエス・キリストが死んで存在しないかのように、隠れ、沈黙していたことだろう。しかし、このヨハネからの書を受けて励まされていく。教会は、イエス・キリストは死んでいるのでも、不在なのでもない。また、隠れているのでも、沈黙しているのでもない。キリストは、教会の中に存在していることを表していく事でのみ、教会としてあり続ける。

「イエス・キリストの黙示」とは、隠された真理がそこにあり、その真理を開示するという意味がある。その「黙示」を見出して行こう。(神谷)